弥勒寺跡

何世紀にもわたって、宇佐神宮境内の一部は弥勒寺という寺院によって占められていましたが、その跡地は呉橋と八坂神社の間に現在も見ることができます。その歴史の大部分において弥勒寺は、神社とお寺の複合体であった宇佐神宮の中の重要なお寺であり、皇室や貴族、そして武士の一族の支援を享受し、傑出した政治的・経済的な権力を持っていました。

弥勒寺は広大な荘園を有し、九州だけでなく全国に影響を及ぼしました。歴史的な記録や地図によると、弥勒寺の境内は、現在の西参道の両側に広がり、お堂、塔、宿坊などの数十の建物で構成されていました。金堂（本堂）には薬と癒しの仏である薬師如来が祀られており、講堂には次の仏として遠い未来にこの世に現れるとされている弥勒菩薩を祀っていました。

宇佐神宮内の最も主要な寺院

弥勒寺の前身は弥勒禅院という古いお寺で、宇佐神宮の最初の御殿が 725 年に小椋山に建てられたすぐ後の 738 年に、小椋山と寄藻川の間の平野に移されました。ほどなくして弥勒寺は、神宮寺（神社と密接につながり、通常はその神社の境内または神社の近くにある寺院のこと）の最も初期の例の 1 つへと発展しました。これにより宇佐神宮は、8 世紀頃に九州で形成されていた神道と仏教の融合（神仏習合）を反映した、神社と寺院の複合体になりました。そのような複合施設の中の寺院は、僧侶を神社での儀式などに派遣したり、財務の管理を行ったり、時には複合施設全体の運営を完全に管理したりすることもありました。9 世紀後半までに、弥勒寺は宇佐神宮のすべての事柄において重要な役割を果たすようになり、宗教的および事務的な機能の両方を果たしました。

弥勒寺の権力の喪失と終焉

12 世紀の平氏と源氏による権力闘争の間、宇佐神宮の宮司は平氏側につくことを選びました。この闘争の中、弥勒寺は宇佐神宮とともに 1184 年に焼き払われ、そして一年後、1185 年に平氏が敗北しました。その後、この複合体は再建されましたが、弥勒寺の権力は衰え始めました。弥勒寺は所有する土地を徐々に失い、境内の建物の数は減少し、19 世紀半ば頃になると、もはや修復されなくなっていました。1868 年に明治政府は神仏分離令を発令し、1871 年までにすべての仏教の建造物などが宇佐神宮から取り除かれました。かつての弥勒寺の境内には現在、宇佐神宮の事務所、宝物館、美しい庭園があり、弥勒寺の過去の栄光を思い出させるものとしては礎石だけが残っています。しかし、弥勒寺の最も貴重な仏像は保存されており、現在、弥勒大仏像は近くの極楽寺に安置され、薬師如来像は川の向こう側の大善寺にあります。